曽根遺跡群 IX

平原周辺遺跡

(5)

福岡県前原市国指定史跡「曽 根 遺 跡 群」

重要遺跡確認調査概要

前原市文化財調査報告書

第 56 集

1 9 9 4

前原市教育委員会

序　　文

平原遺跡は昭和40年に発見され故原田大六氏を中心に発掘調査が実施されました。当時はのどかな田園風景が広がっていたこの地にも、昭和50年代後半には宅地化の波が押し寄せ、現在では遺跡のすぐ傍にも住宅が建ち並ぶようになってまいりました。このことを憂慮した当教育委員会では、平原遺跡周辺の実態を把握するために昭和63年度から国・県の補助を受けまして確認調査を実施しているところであります。

本年度は、指定地（1号墓）の北側の確認調査を実施いたしました。その結果1号墓から北へ延びる溝がさらに延びていることが確認されました。その他住居跡、土坑などが確認されておりますが、方形周溝墓を確認するにはいたりませんでした。

昨今の不況下にあっても住宅建設は増加の途をたどっており、平原遺跡周辺においても例外ではありません。当教育委員会といたしましては今後もさらに確認調査を実施するとともに、遺跡の保存・環境整備等様々な課題の解決に向けて一層の努力をいたす所存であります。

なお末筆となりましたが、発掘調査について快諾戴きました地権者の上野正明氏には深謝の意を表します。

平成6年3月31日

前原市教育委員会
教育長　樗木昭生

例　　言

1. 本書は平成5年度に国・県の補助を受けて前原市教育委員会が実施した平原周辺遺跡の重要遺跡確認緊急調査及び平成4年度の調査の一部の概要報告である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は角　浩行、岡田りつ子、柏田睦子、中峰幸枝、和多治子が行い、遺物実測図の作成は角、是田　裕（福岡大学学生）が行った。
3. 本書に掲載した図面の製図は角、中原晴香が行った。
4. 本書に掲載した現場写真の撮影は角が行い、遺跡全景写真の撮影は朝空中写真企画が行った。
また、巻首および巻末の遺物写真は岡紀久夫の撮影によるものである。
5. 本書に示した方位は座標北である。
6. 本書の執筆、編集は角が行った。

表紙写真は曽根丘陵

本 文 目 次

Ⅰ. は じ め に …… 1
1. 調査にいたる経過 …… 1
2. 調 査 の 組 織 …… 1
Ⅱ. 調 査 の 記 録 …… 3
1. 調 査 の 概 要 …… 3
2. 遺 構 と 遺 物 …… 5
3. 平成4年度の調査 …… 8
Ⅲ. お わ り に …… 9

挿 図 目 次

Fig. Ⅰ 平原遺跡出土品Ⅰ（重要文化財）
Fig. Ⅱ 平原遺跡出土品Ⅱ（重要文化財）
Fig. 1 平原遺跡周辺地籍図（1/1,500） …… 1
Fig. 2 平原遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/10,000） …… 2
Fig. 3 調査区遠景（手前は1号墓） …… 3
Fig. 4 調査区全体図（1/100） …… 4
Fig. 5 第6次調査トレンチ設定状況（1/500） …… 4
Fig. 6 溝 検 出 状 況 …… 5
Fig. 7 木 棺 墓 …… 5
Fig. 8 1 号 土 坑 …… 6
Fig. 9 2 号 土 坑 …… 6
Fig. 10 出土遺物実測図（1/3） …… 7
Fig. 11 5号墓主体部 …… 8
Fig. 12 甕棺墓実測図（1/20） …… 8
Fig. 13 甕 棺 実 測 図（1/6） …… 9
Fig. 14 第1～6次調査トレンチ位置図（1/1,000） …… 10

方格規矩鏡
（1号鏡 径23.3cm）

方格規矩鏡
（6号鏡 径18.5cm）

Fig. Ⅰ　平原遺跡出土品Ⅰ（重要文化財）

Ⅰ．は　じ　め　に

1.　調査にいたる経過

平原遺跡（「国指定史跡曽根遺跡群」）周辺の重要遺跡確認緊急調査は昭和63年度から平成３年度まで５次にわたり実施している（岡部1990・1991、角1992・1993）。昨年度までの調査で方形周溝墓１、円形住居跡５、土坑、ピット等が確認されている。方形周溝墓（５号墓）は後期初頭～前半のもので１号墓との関連が注目される。また、住居跡はいずれも中期初頭～前半と考えられ、短期間ではあるが集落が存在していたことが判明した。また、夜臼期のものと思われる土器片も出土しており、その時期の遺構の存在も予想される。このような状況の中で本年度は、指定地の北側隣接地の確認調査を行うこととした。

指定地の北側については、平成元年度に大字有田８番地の確認調査を実施している（岡部1991）。その結果によると円形住居跡、土坑、ピットが検出されている。住居跡は弥生時代中期前半のものと考えられるが、後世の削平により遺存状況はかなり悪い。また、墳墓遺構と考えられるものも検出されなかった。

今年度は指定地北側について墳墓遺構の広がりを確認することと、１号墓から北に延びる溝の続きを確認することを調査の目的とした。そこで大字有田７－２番地について地権者と交渉を行い、承諾を得たので調査を実施した。

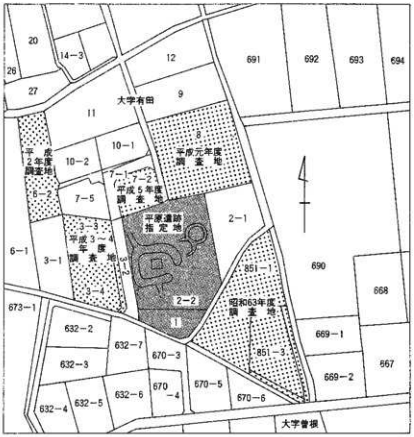


Fig. 1　平原遺跡周辺地籍図（1/1,500）

2.　調 査 の 組 織

本年度の発掘調査に関わる組織は以下のとおりである。

地権者	上野正明		
調査主体	前原市教育委員会		
総括	教育長	樗木昭生	
	教育部長	中原直国	
	文化課長	清水義弘	
	文化課文化財係長	川村博	
庶務	同　文化振興係長	清水真澄	
調査	同　文化財係主事	角浩行	

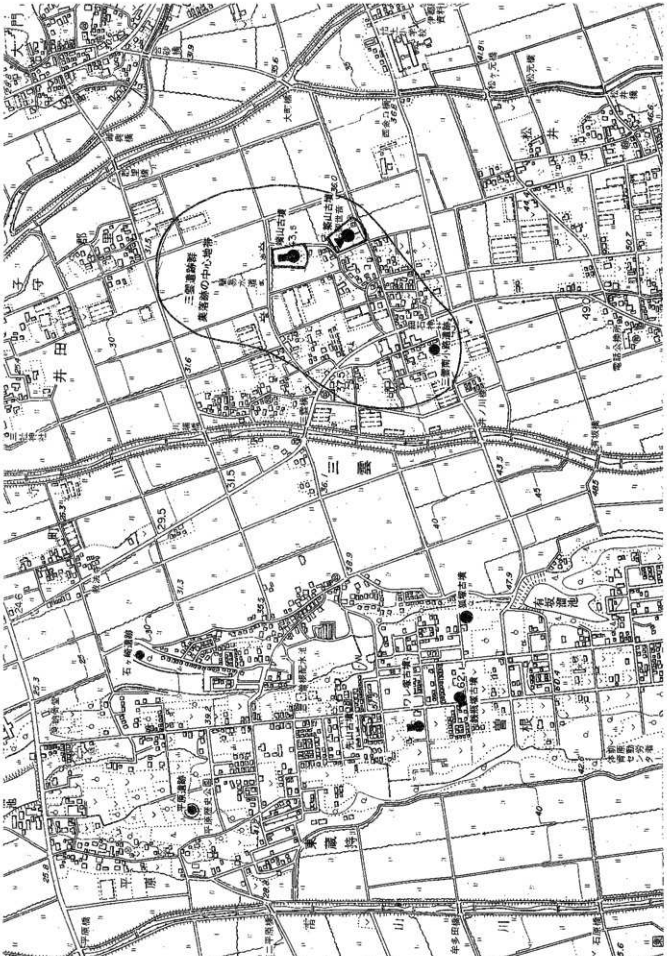


Fig. 2　平原遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/10,000）

Ⅱ. 調 査 の 記 録

1. 調 査 の 概 要

調査の承諾を得た７－２番地は以前は畑であったが、現在の地目は雑種地である。現状は雑草が生い茂り、小樹木が数本見られるような状況であった。そこで伐採の後に調査地の南半分に東西方向に第１トレンチを設定した。トレンチは当初長さ15.5m、幅5.5mであったが、後に西端を長さ4.5m、幅４m、東端を長さ７m、幅４m、それぞれ北に拡張し最終的にはコの字状となった。また樹木の関係から調査ができない部分を除いて、第１トレンチに囲まれた部分に長さ4.5m、幅3.5mの第２トレンチを設定した。いずれのトレンチも遺構の検出状況によって部分的に拡張した。

トレンチ設定の後人力により表土の除去を行い、遺構の検出を行なった。調査地点の層序は上層より黒褐色土層（表土、厚さ約５cm）、暗灰褐色泥砂土層（耕作土、厚さ約５～15cm）、黄褐色粘質土層（地山）である。遺構は黄褐色粘質土層上面で検出された。検出した遺構は溝１、木棺墓１、円形住居跡２、土坑５、ピット多数である。

溝は１号墓から北に延びる溝の続きで、第１トレンチの西端を横断し調査区外にさらに延びていることが確認された。明らかに墳墓と考えられるものは第１トレンチで検出した木棺墓のみであるが、残念ながら時期を決定できるだけの遺物は出土しなかった。土坑については平面プランが隅丸方形と楕円形のものが見られるが、この中には墓と考えられるものもある。円形住居跡はいずれもかなり削平されており、１号住居跡は中央の炉跡と柱穴が検出されただけである。

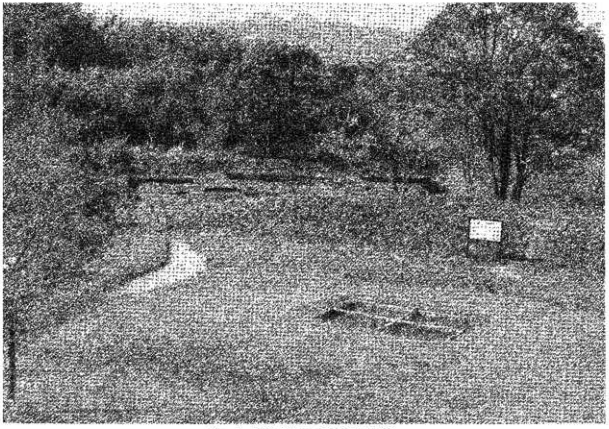


Fig. 3　調査区遠景（手前は１号墓）

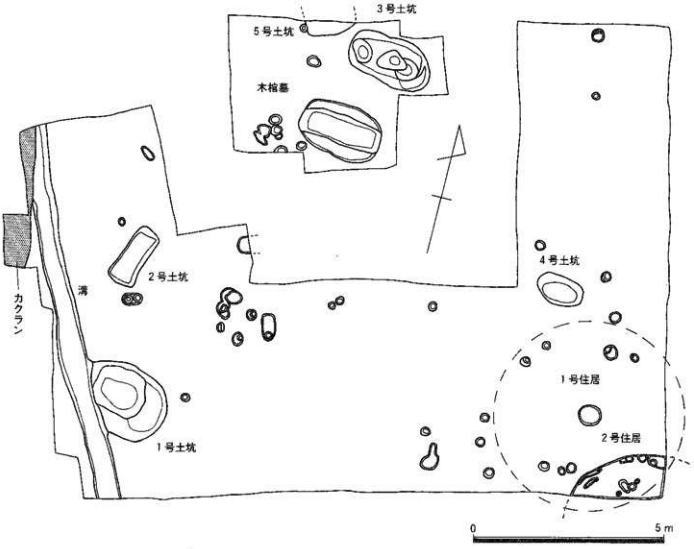


Fig. 4　調査区全体図 (1/100)

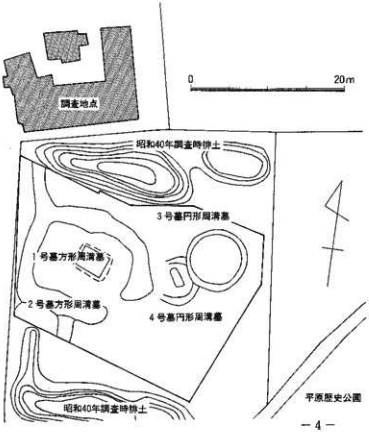


Fig. 5　第6次調査トレンチ設定状況 (1/500)

2. 遺構と遺物

(1) 溝

第1トレンチの西端を南北に横する溝が検出された。幅50～60cm、長さ約10mを検出した。断面はほぼ逆台形で深さ20～30cmである。この溝は1号墓から北側に延びる溝の続きで、第1トレンチの西端を横断し調査区外にさらに延びている。出土遺物は、土器片が小量出土したのみである。

(2) 木　棺　墓

第2トレンチで検出された。主軸を東西にとる。掘方は2段に掘られ、1段目の掘方は楕円形のプランを呈し、長径220cm、短径140cmを測る。2段目の掘方はほぼ長方形を呈し、長さ220cm、幅80cmを測る。深さは50cmである。木棺は遺存していない。出土遺物は、土器片が小量出土したのみである。時期は不明である。

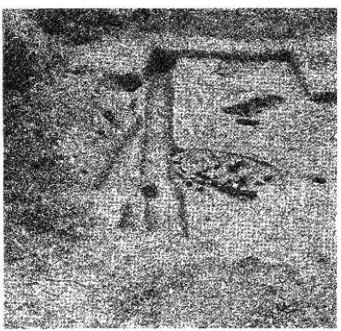


Fig. 6　溝検出状況

(3) 土　　坑

1 号 土 坑

第1トレンチの西南隅で検出された。楕円形のプランを呈し、一部溝と重複している。長径255cmに復元され、短径は180cm、深さ30cmを測る。溝との切り合い関係は確認できなかった。出土遺物は、土器、石器であり、土器は弥生時代前期末～中期初頭のものである。

2 号 土 坑

第1トレンチの西側拡張部で検出された。隅丸長方形のプランを呈し、主軸を南北方向にとる。長さ170cm、幅70cmを測り、深さ25cmを測る。甕形土器が出土しており、時期は弥生時代前期末～中期初頭であろう。

3 号 土 坑

第2トレンチで検出された。主軸を東西にとる。やや歪んだ楕円形のプランを呈し、長径230cm、短径120cm、深さ40cmを測る。土器片が数点出土したのみで、時期は不明である。

Fig. 7　木　棺　墓

4 号 土 坑

第1トレンチの東側拡張部で検出された。楕円形のプランを呈し、長径130cm、短径70cm、深さ20cmを測る。土器片が数点出土したのみで、時期は不明である。

5 号 土 坑

第2トレンチ北端で検出された。承諾を得た土地の境界際であったため、拡張して全体を確認することは断念した。また、遺構の掘下げも行なっていないので、規模、プラン等については不明である。

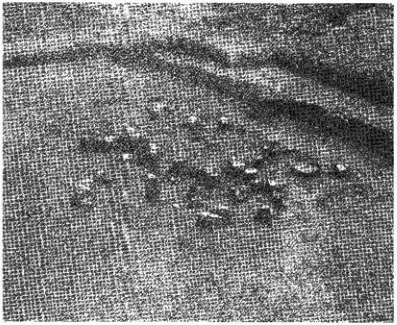


Fig. 8 1 号 土 坑

(4) 住 居 跡

1 号住居跡

第1トレンチの東南隅で検出された。かなり削平を受けているようで、遺存状況は悪い。中央の炉跡と思われる土坑が検出されそれを中心に、距離160cmの円周上でピットが検出されたため住居跡と判断した。主柱穴と思われるピットは2個を確認したのみである。径6mの住居跡に復元しているが、プランについては円形である確証を得たわけではない。ただ炉跡と思われる土坑より弥生前期末～中期初頭と考えられる甕の底部が出土したことから円形と考えた。

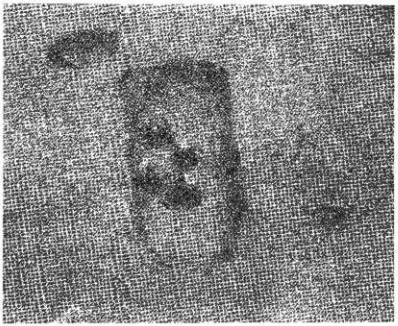


Fig. 9 2 号 土 坑

2 号住居跡

第1トレンチの東南角でその一部を検出した。かなり削平を受けているようであるが、こちらは周壁がわずかに遺存していた。深さは5cmほどである。部分的に周壁溝が掘られ、主柱穴と思われるものを1個検出したのみである。これも検出した場所が承諾を得た土地の境界際であったため、調査区を拡張することができず全体を検出することは断念した。よって規模については不明である。出土遺物は土器片が数点出土したのみである。

(5) 出 土 遺 物

1 号 土 坑（2～6，8～10）

2～6は甕型土器の口縁部の破片である。2、3、5は如意形の口縁である。は口縁下部に2条の沈線を巡らす。外面沈線下はハケ、それ以外はナデである。3は器面が風化して、調整は不明である。5は口縁が立ち気味で、胴がやや張る。外面ハケのちナデ、内面はナデである。4、6は口縁の断面が三角形を呈する。いずれも口縁下に1条の突帯を巡らす。調整はいずれも内外面ともにナデである。

8、9は甕型土器の底部の破片である。いずれも外側に張り出し、上げ底となる。8は器面が風化して、調整は不明である。底径7.0cmを測る。9は底面に粘土の接合痕がみられる。外面ハケ、内面ナデである。底径7.8cmを測る。

10は小型の壺形土器である。しまった口縁に偏球形の胴部がつく。底部は上げ底気味で、頸部の付け根に断面三角形の突帯を1条巡らす。胴下部に穿孔が施される。内面肩部に粘土の接合痕がみられる。口径4.7cm、胴径10.3cm、器高10.1cmを測る。

時期はいずれも弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

2 号 土 坑（1，7）

1は甕型土器である。やや立ち気味の如意形口縁で、胴部は張り気味である。内外面ともにナデである。口径24.8cmを測り、高さ11.2cmが遺存する。7は底部の破片である。外側に張り出し、上げ底となる。外面は器面が風化して調整は不明、内面はナデである。底径6.2cmを測る。

時期はいずれも弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

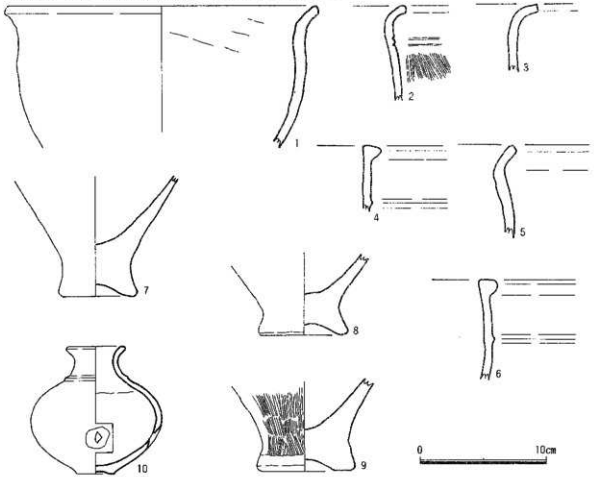


Fig. 10 出土遺物実測図（1/3）

3. 平成4年度の調査

ここでは昨年度調査を行った5号墓（方形周溝墓）の主体部及び周溝内から検出された甕棺について補足を行いたい。

(1) 主　体　部

ほとんどが攪乱を受けており一部が遺存していたのみである。埋葬施設は木棺であり、主軸を東西方向にとる。

掘方は2段である。1段目の掘方は隅丸方形を呈し、幅190cmを測る。長さ90cm、深さ10cmが遺存するのみである。2段目の掘方も隅丸方形を呈し、幅80cm、深さ37cmを測る。長さは50cmが遺存するのみである。

2段目の掘方内から棺の痕跡が検出されたため、木棺と判断した。箱形木棺と考えられ、幅60cm、深さ28cmを測る。長さはわずかに20cmが遺存するのみである。出土遺物は土器片が数点出土したのみである。

(2) 甕　棺

南側の周溝から、検出された。甕棺の埋葬に伴い周溝が掘り直され、墳丘が拡張されたと考えられる。

掘方は不整形を呈し、甕棺の主軸方向で90cm、主軸と直交方向で85cmを測る。深さは60cmが遺存する。甕棺は水平から52°の角度で埋置されている。

上甕には高坏が使用されている。脚部が欠損しているが、もともと打ち欠かれていたものか、削平により失われたものかは不明である。下甕には壺形土

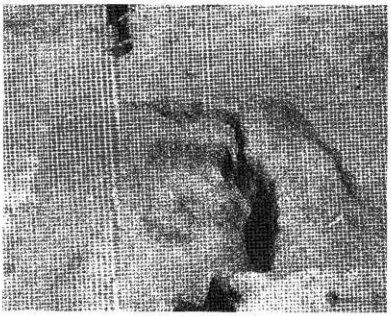


Fig.11　5号墓主体部

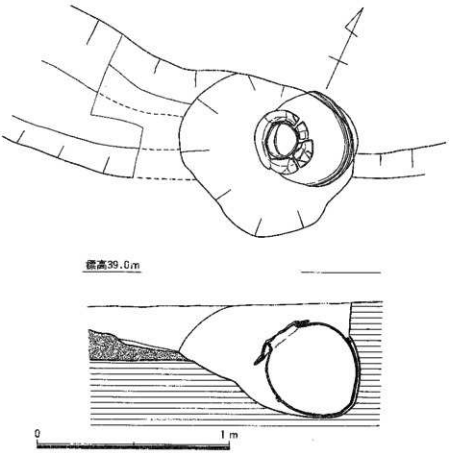


Fig.12　甕棺墓実測図（1/20）

器が使用されている。頸部は打ち欠きにより欠損している。

上　　壺

鋤形口縁の高坏で、脚部を欠損する。口径34cmを測り、高さ7.0cmが遺存する。内外面ともに丹塗りである。調整は内面はミガキで、外面は風化が激しく不明瞭であるがミガキである。

下　　壺

壺形土器で頸部より上を打ち欠きにより欠損する。頸部径19.7cm、胴径49cmを測り、高さ53.5cmが遺存する。

全体に丸味を帯びたプロポーションで、底部は平底である。底部から若干丸味を帯びて胴中位にいたる。肩は張らず、頸部は遺存する部分ではほぼ真っすぐに立ち上がる。胴部の最大径は中位にある。頸部と胴中位に、断面が台形の２条突帯を巡らす。胴下半部に穿孔が施されている。外面は丹塗りである。

調整は外面が板状工具による擦過で、内面はナデである。

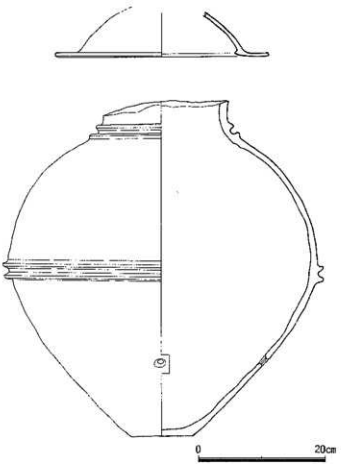


Fig.13　壺棺実測図（1/6）

Ⅲ．おわりに

今年度の成果として、１号墓から北へ続く溝が確認されたことがあげられる。溝は調査区の西端を横断し、さらに調査区外に続いている。調査区の地形は南から北へとわずかに傾斜しており、傾斜の方向に合わせて溝が掘られている。この溝は１号墓の周溝の排水溝の役割を果たしていたと考えられる。そこで検出された溝底の高さを見てみると、南端で標高37.23m、北端で標高36.97mである。また、１号墓の周溝底は南東隅の陸橋脇が最も高く、そこから北西隅に向って傾斜を持つように掘られている。このことから検出された溝は１号墓周溝の排水の機能を充分に果たしていたと考えられる。今後はさらに延びるこの溝がどこまで続くのか確認が必要となった。

ところで、この溝を単に排水だけのものとしてとらえてよいのかという疑問が生じてくる。というのはただ単に排水のためだけであれば、これほど溝を長くする必要があったのかということがある。溝は南から北に向かうに従って深さを増しており、溝底のレベルだけをみて合理的に考えれば調査区内で終わっていてもその機能は果たせると考えられる。このことについては周溝墓築造当時の地形との関係も考慮しなければならないが、なぜこのような長い溝が必要であったのか検討の必要があるだ

ろう。

次に5号墓にも周溝の北西端に北へ延びる溝が接続していることが確認されており、1号墓と全く同じ形態をとっていることが注目される。5号墓の周溝底の高さを見てみると東側を除いて標高38.50m前後で同じレベルであるが、東側だけが標高38.35mとやや低い。北西端の溝底の標高は38.42mで若干低くなっており、これもやはり排水の機能をもっていたと考えられる。5号墓については北側へ延びる溝がどこまで続いているのかはまだ未確認であるが、1号墓と同様かなり延びていることが予想される。今後は北側へ延びる溝の続きを確認し、この溝の性格について検討する必要があるだろう。

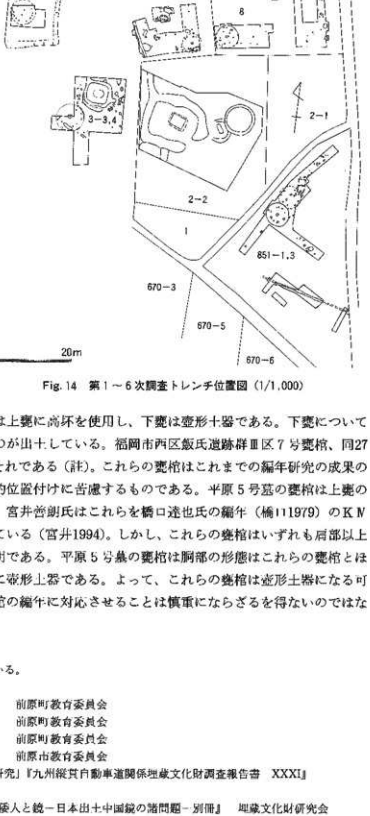


Fig. 14　第1～6次調査トレンチ位置図（1/1,000）

最後に5号墓から検出された甕棺について若干ふれてみたい。甕棺は上甕に高坏を使用し、下甕は壺形土器である。下甕については近年糸島地方において同じ形態のものが出土している。福岡市西区飯氏遺跡群Ⅲ区7号甕棺、同27号甕棺、前原市東太田遺跡1号甕棺がそれである（註）。これらの甕棺はこれまでの編年研究の成果の中で直接比較できる資料がなく、編年的位置付けに苦慮するものである。平原5号墓の甕棺は上甕の高坏から後期初頭～前半と考えられる。宮井善朗氏はこれらを橋口達也氏の編年（橋口1979）のＫＮｃ式ないしＫＶａ式の直前に位置付けている（宮井1994）。しかし、これらの甕棺はいずれも肩部以上を打ち欠かれており、全体の器形が不明である。平原5号墓の甕棺は胴部の形態はこれらの甕棺とほとんど同じであるが、こちらは明らかに壺形土器である。よって、これらの甕棺は壺形土器になる可能性もあり、ストレートにいわゆる甕棺の編年に対応させることは慎重にならざるを得ないのではないだろうか。

（註）宮井1994に実測図が掲載されている。

（引用文献）

岡部裕俊　1990　『平原周辺遺跡　(1)』　前原町教育委員会

岡部裕俊　1991　『平原周辺遺跡　(2)』　前原町教育委員会

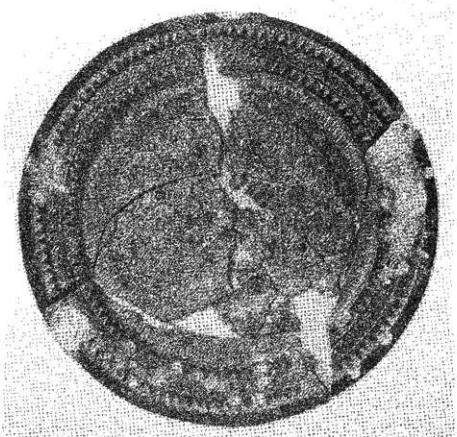
角　浩行　1992　『平原周辺遺跡　(3)』　前原町教育委員会

角　浩行　1993　『平原周辺遺跡　(4)』　前原市教育委員会

橋口達也　1979　「4.　甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　XXXI』福岡県教育委員会

宮井善朗　1994　「北部九州の漢鏡」『優人と統－日本出土中国鏡の諸問題－別冊』　埋蔵文化財研究会

方格規矩鏡
(32号鏡 径18.8cm)



方格規矩鏡
(34号鏡 径16.4cm)

Fig. II　平原遺跡出土品 II（重要文化財）

報告書抄録

フリガナ	ヒラバルシュウヘンイセキ (5)
書名	平原周辺遺跡 (5)
副書名	福岡県前原市国指定史跡「曽根遺跡群」重要遺跡確認調査概要
巻次	
シリーズ名	前原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編集者名	角 浩行
編集機関	前原市教育委員会
所在地	福岡県前原市大字有田字平原
発行年月日	西暦 1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ヒラバルシュウヘンイセキ 平原周辺遺跡	前原市大字有田字平原			33°32′	130°14′	1994. 3. 1～ 3. 31	160	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平原周辺遺跡	墳墓群集落	弥生中期～後期	方形周溝墓 1基 木棺墓 1基 土坑 5基 円形住居跡 2軒	弥生土器・石器	

平原周辺遺跡

(5)

前原市文化財調査報告書
第 56 集

平成6年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31